〔論説〕

日本人の信仰心とキリスト教

佐伯啓思

一

いささか漠然としたいい方だが、倫理観において日本人と西洋人はかなり異なっているといわれる。確かにそういう印象をもっている人は多いであろう。

倫理には二つの側面があり、ひとつは、人の行為の規制や方向付けが、個人の内面的な自己抑制や自己点検という精神作用によるという側面であり、もうひとつは、それが社会や世間といった、個人にとっては外的要素によって規制される側面である。

西洋の倫理観が前者に傾き、日本のそれが後者に傾くというしばしばなされる指摘は、またそこに、個人主義の西洋的価値基準と世間主義の日本的価値基準の対比を想定している。そこで、われわれは、つい、個人の内面に根を張った西洋的倫理観を基準にして、日本人は倫理観が脆弱であるとか曖昧であるといいたくなるようだ。

おおまかにそのようにいうことは可能かもしれない。ただ、ひとつの社会の倫理観が、マックス・ウェーバー

を持ち出すまでもなく、その社会の底を流れる宗教的意識と切り離せないこともまた事実であり、そのことが私には気になる。そこで今回は、日本人の信仰心のありようについて考えてみたい。

もっともこれは大テーマであり、とても正面から太刀打ちできるものではない。ここで論じてみたいのは、遠藤周作の『沈黙』を素材にした、あるひとつの局面についてである。

『沈黙』は、江戸時代のキリシタン禁制下の長崎に密航したポルトガル・イエズス会の若き司祭の一人であるセバスチャン・ロドリゴの物語だ。彼があえて日本に潜入したのは、ひとつは、迫害にあえぐ隠れキリシタンに対して司祭の役目を果たすためであるが、もうひとつ目的があった。それは彼の尊敬する師であり、すでに二十年前に布教のために渡日した偉大なフェレイラ教父の安否をたずね、彼が日本の異教に転教したというわさを確かめるためであった。

物語の筋は本書にあたってもらうとして、この書物のテーマは、まずは、神は存在するのか、また神とは何か、という大問題である。長崎の地で、ロドリゴは、壮絶な拷問にあう異国の信徒を目撃し、この民を前にした神の沈黙に苦しむ。神の救済のみを信じて殺される殉教者を神はなぜ見捨てるのか。結局、ロドリゴは、拷問を加えられる日本人信徒を見捨てることはできず、また、すでに棄教したフェレイラに背中を押されて踏み絵を踏む。すでに沢野忠庵という名の仏僧になっていたフェレイラは、自分が棄教したのは、これだけの拷問に苦しむ信者を神は見捨てたからだという。

フェレイラのこの言葉に反発するロドリゴは最後に踏み絵を踏んだ。神が「踏むがよい」といった、と彼はいう。「自らを踏みつけるものをも許す」（ユダをも許す）のが神の愛であった。神は沈黙していたのではない。もし神は沈黙していたとしても、自分の人生はずっと神とともにあり、自らの人生そのものが神の存在を語ってい

た。

この時に、ロドリゴは真の信仰に目覚めたと一応いうことができるのであろう。教会や司祭制度などもはや問題ではない。聖職者という特権も問題ではない。信仰は、神の絶対的な愛を真に信じるものの内面にこそあり、その純粋なこころの内に彼とともにある。ロドリゴはこういっているように聞こえる。

だが、信仰は結局こころの問題であるなどといってしまえば、長崎奉行の井上筑後守の「踏み絵など形だけじゃ、形などどうでもよいではないか」といういい方と大差なくなるであろう。井上もまた転びキリシタンであった。

ついでながら、マーチン・スコセッシ監督による映画「沈黙 ―サイレンス―」では、転教した後に日本人貿易商になっていたロドリゴが死に、仏教流儀の葬儀が行われたとき、彼の死装束の胸のうちに十字架が隠されている映像をみせて映画は終わっている。

二

この問題にはまた後でたち帰るとして、本書にはもうひとつの大事なテーマがあった。それは、キリスト教は決して日本には根付かないという日本人の信仰心の問題である。

キリスト教の教えは普遍的でありそれはすべての国と土地を超えた真実である、というロドリゴに対して、フェレイラはいう。「日本人は人間と隔絶した神を考える能力をもっていない。日本人は神の概念をもたないし、これからももたないであろう」と。「私がたずさえてきた苗はこの日本という沼地でいつのまにか根も腐ってい